# 転校生とテニス

そぅイヤー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転校生とテニス

【Ｎコード】

Ｎ４０１８Ａ

【作者名】

そぅイヤー

【あらすじ】

田舎の隅にある小さな高校その中に俺はいる。毎日同じような出来事同じように過ごす時間・・・正直俺はこんな暮らしこりごりだった。あいつが来るまでは・・・

# プロローグ

今日もいつもの同じ日々が始まると思いながら歩いていると、うしろから
「おはよう！今日もいい天気だねー何かいいことがありそうだね拓也！」
「なんだ。静香か。」
こいつは、幼なじみの永見静香だ。いつも朝はこいつと登校する。
校門を過ぎた辺りで静香が言った。
「帰りも一緒に帰ろうね！」
俺はきっぱりいった。
「いやだ。」
「ギャビーン！」
そういいながら静香は去っていった。なんていうか、リアクションが古い！なぜに昭和風！？そうツッコミを入れたかったがもう彼女の姿はなかった。下駄箱で靴をはき換え俺は三階にある自分の教室に向かう。
教室に着くとすぐに一番後ろの自分の席に座った。それから特に何もせず待っていると担任がやってくる。
「ぉお～今日もみんな揃ってるな～関心関心ガハハハハ！」
うちの担任は体育教師の北野。体育教師のくせにデブなのでみんなからはブタ野先生と呼ばれている。普通なら怒るはずなのにブタ野と呼ばれるのを気に入っていた。まったく訳が分からない先生だ。
いつもと違ったのはここからだ。
「よし！今日は転校生を紹介するぞ！入りなさい！ガハハハハ！」
がらがらと前の扉が開いた。俺は気にもならなかったので外をみていた。だが教室がさわがしい。気になって転校生をみてみる。
俺は開いた口が閉まらなくなった。体付きはいいのだが問題は格好だ。

カバンはテニスボールがたんまりはいっているのか形が浮いていて、背中には赤ちゃんをおぶる紐にラケット。しかも二本。ポケットにはさっき買ったであろう月刊テニス通信がまるめて入っていった。
「初めまして！僕の名前は織田尚志です！よろしくです！」
あいさつをききながら俺は心でこう思った。いやみんなもであろぅ。
『こいつテニス馬鹿だ。』当たり前である。転校当時にそんな格好で来る奴はいない。来る奴はテニス馬鹿ぐらいからだ。こういうのにはあまり触れ合わないほうがいい。
「じゃあ席は水城の隣な！」
あ、そういえばこの物語の主人公を知らない人のために説明しておこう。彼の名前は水城拓也。上坂高校に通う高三だ。ついでに幼なじみの永見静香も高三である。
そう説明している間に織田は隣に座っていた。　　こやつ瞬歩や瞬歩使ってるで！さっきまで教卓の隣に居たのに説明している間に隣の席にいたらそうツッコミを入れたくなるだろう。心の中で。そんなこんなでホームルームは終わった。

## HRが終わって……

ホームルームが終わり隣の席は人が集まっていた。当然拓也も気になって間からみてみる。
そしてふいに、織田が声をかけてきた。
「テニスしないかなぁ？水城君！きみいい体付きしてるからいいスマッシュ打てるよ！きっと。」
「いやだ。俺はやんねー。」
「ぎゃびーん。」
はやっ！ってツッコミを入れたくなるほどぎゃびーん！がはやかった。さすが瞬歩使い！喋るのも早いね。うんうん。
拓也がそう思っていると、静香がやってきた。やってきた静香はふいにこう言った。
「テニスしようよ！」
「いやだ。」
「ぎゃびーん！」
やっぱりこの反応かよ・・・そうして静香は泣きながら自分の教室に帰っていった。
そしていつもとかわらないはずの1限。だが1限は転校生が来たって事で身体測定になった。幸い毎日体育があるので大体みんなが体操服を持っていた。男子は上は紺色のエリつきしたは普通ジャージで女子は上は男子と一緒だが下は半ズボンにスカートが付いている全くわけがわからない作りだ。ついでに男子のジャージの方が高いといういかにもレディーに優しい学校だ。だが女子生徒は男子生徒に比べて少ないらしい。まぁこんな学校に来るのはおバカか余程のコスプレ好きぐらいであろう。学生服は学ランで女子はごく普通のセーラー服で男子はそこが不満らしい。校長が言うにはそこまで予算が回らなかったらしい体操にお金をかけ過ぎて。そんな話をしながら友達の和哉と着替えていたら授業が始まるチャィムが鳴り響い

ていた。
「やべぇぞ和哉！早く行かないとブタ野がキレるぞ！」
「ってお前が着替えるの遅いんじゃ！俺はいくぜ！グッバイ拓也！」
「てめぇ！くそ。はけない。和哉待て！俺を置いていくな！くそ。
まだはけないのか。えぇい面倒だこのままで行ってやる！」とか言
いながら拓也はズボンがはけないまま体育館にむかっていった。

## 身体測定？（前書き）

えぇっと書いていてだんだん題名のテニスと掛け離れてる気がしますが、まぁ楽しんで読んでくれたら嬉しいです。

## 身体測定？

体育館に着くと全クラス集まっていた。うちの学校は一学年で四クラスある。俺はC組て静香はA組だ。すると、
「えーみなさん集まりましたかね？わたしは教頭の田中正憲です。決してハゲてないですよ。ごふぉん。まぁそれはいいとして、みんなはスポーツが好きかぁ～！？」
今ステージで話してるのは教頭の田中正憲（４４歳妻子あり）自分ではハゲてないつもりだが周りからはハゲてるのがまるわかりだ。
「って先生～身体測定とスポーツは関係あるんですかぁ？」
一人の生徒が教頭に質問する。
「ん？全く関係ないよ？身体測定は偽りだ！やっぱ球技大会に変更！それで決定！いや～青春っていいですなぁ～」
とか言いながら教頭は職員室に帰っていった。職員はどうしようか迷っていた。一人ガーハハハ騒いでるのもいたけどね。
「なんか今日はいつもと違うな…」
「俺が転校してきたからな！」
親指を立てていってる織田を見たけどとりあえず無視してみた。
「ガッテム！スルーされたぜ！何でスルーされたかな～？和哉なんでだと思う？」
いつのまに和哉と仲良くなっているんだ！こやつやはり忍者か！もしかしてこいつすごいのか・・・・
「・・・・さぁ？」
すごい和哉満面な笑みで答えやがった。まともに満面な笑みで答えやがった。
そんな感じで会話をしているとブタ野が、
「今日は教頭がいったと通り球技大会に変更だ！ガハハハハ！何かやりたい種目はあるか？
」

「テニス！」
はやっ！やっぱこいつはやい！流石瞬歩さすが忍者！
「却下」
「ギャヘシ！」
ブタ野の却下ってのもはやっ！織田に負けてないな・・・
話し合いの結果バレーとソフトボールになったらしい。織田は最後までひとりで粘っていたけど相手にされなかったらしい。まぁそんなものであろう。
「じゃあバレーする人とソフトする奴で分かれろよ～チームは男女混合で２０分後試合開始だ！ガハハハハ！」
そういってブタ野は職員室に帰っていった。種目が決まった事で俺達のクラスはまとまって会議をしていた。議題は織田をどっちに入れるかでだ。そこで室長の佐々木が、
「奴どうする？」
そこで俺は、
「ん～入れるならバレーだな。テニスしてるみたいだしそこまでへましないと思うがな。後ついでにおれはあいつと組みたくないからソフトで。」
「じゃあ決定！あとは適当にわかれていいよー」
クラスのみんなが適当に返事して散らばっていった。そのあと静香がやってきて、
「どっちやるの？うちはバレーにしたんだけど。」
「ソフトやる。」
「ギャビーン！今日はなんかうちに冷たいよ～びひぇ～ん！」
最後のびひぇーんって・・・そうしてるうちに静香はどっかに走っていった。特におれ静香になにもしてないと思いながらもちょっと反省してみる。
それから１０分後…俺は外靴に履きかえて和哉と一緒に運動場に出た。
しばらくたってトーナメント表が貼られた。俺らはなんと一試合め

でA組とだ。ここで佐々木が集合をかけた。
「まぁ～余裕で勝てる相手なのでコールドで終わらす気でいくぞー？」
なぜに疑問系かよくわかないが取りあえず首をふる。
「なぁなぁ～水城君！俺何番かな？出来れば４番ピッチャーがいいぜ！」
取りあえず無視し……って！
「なぜに織田君はここにいるんだい？」
「えぇっとバレー行けって言われたけど……着いて来てみた！」
取りあえずフトモモに蹴りを入れてみる。
「ギョハッハ！効かん！」
「そうか……」
左右左アッパーのコンビネーションを織田に放つ。
「グョフゥブヘッハァ！」
あっ！倒れた。まぁこれでいいだろう。「まだまだ～ほら水城君！もっと打ってこいよ！」
取りあえず集合かかったし地面に張り付いた状態なので織田は無視しておいた。
「じゃあこれから試合を始めます！礼！」
みんなが軽く礼をして試合が始まった。織田は地面に張り付いたままだった。

## 身体測定？（後書き）

えぇっと最後まで読んで嬉しいです。できれば感想などをお願いします。

## ソフトボール～！（前書き）

えーなんか最近色々忙しかって久々投稿です。最後まで見ていただけれは光栄です。

## ソフトボール～！

さて試合が始まったわけだが……

「ＨＥＹ！バッチ！さぁ打てるものなら打ってみろよ！」なぜか織田がピッチャーしてるわけで……「生意気言うな！転校生！ハァァァァ！」

バッターはあんな風だし……

「ハハハハハ！俺のライズに不可能はない！」

何故かナイスピッチングだし……

なんだかんだで最終回０対０２アウトフルベースで拓也に打席が回って来た。ここで打てなきゃヒットの差でＡ組に負けてしまう。ここで織田が満面な笑みで、

「がんばって！水城君！君なら打てるよ！」

憎たらしかったので鳩尾に一発突きを入れてやった。織田の反応は言うまでもない。「お？最後は拓也か？こりゃぁ勝ちはもらったな！」

「谷口ーお前が俺をうちとれるのか？」

今Ａ組の投手は昔からの知り合いの谷口大輝。根っからの野球好きだ。

普通に考えたら勝算は無いのだが拓也には打つ自信があった。理由はないが。拓也は右打席に入って構える。初球谷口は内角高めにホップ気味のたまを投げてきた。もちろん俺は空振りだった。ニ球目外に逃げる球を投げてくるここは見逃してボールだった。

「ほーあのコースを見るとはな！さすがだな！」

「だろ？ハハハ……」

実際手が出なかっただけだがな！

三球目今度は真ん中から外に逃げる球を投げてきた。

「へっ！もらった！」

空振り。

「ふん！だせっ！（笑）」
「うっせ！」
カウント2ー1。窮地に追い込められた拓也は、
「男と男の勝負だ！ど真ん中に投げてこいや！」
「いやだ！打たれたくないし！」
断られた……
四球目はなぜか真ん中に投げて来た。
「よっしゃー！もらったぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
だがそう叫んだ瞬間ボールが急激にホップした。
そして空振り三振でゲームセット。
拓也がベンチに戻るとすごい勢いでクラスメートに囲まれて罵声を浴びせられた。織田も混ざってたので取りあえず首根っこを持ってDDTをかましてやった。
「血が～血ガァァァァァァァ～」
どこか去っていったとさ。

## 体育館で……

みんなに罵られたあと（織田にはＤＤＴかましてやったけど）和哉と体育館に戻っていた。
体育館ではバレーの試合の最中だった。
「拓也見に来てくれたのー？」
「まぁそんなところだな。今俺らのクラスが勝ってるのか？」
「そうだよー！そういえばソフトはどうだったの？」
あの悪夢が甦ってくる……
「ぐっ……」
「水城君の空振り三振でゲームセットだよ！」
織田が横から……ってまたいつのまにか横にいた織田にビックリしながらラリアットを仕掛ける。そこで織田も覚醒したのかかわして後ろを取る。そのまま流れるように投げの動作に入るが体がひょろいから拓也を持ち上げれなかった。そうしたら拓也の反撃だ。まず肘で顔を殴って、ラリアットして、バックを取ってジャーマンでフィニッシュだ。
「ふぅ。やったか……」
「ねぇ拓也？織田君泡はいてるよ？危なくない？」「邪気が出てるだけだよ！いつか復活するさ！」
「そう？そうなのかな？」
「そうに決まってるよ！」
そうしている間にバレーの試合は終わっていた。
「あ！うちの出番だ！見ててね拓也！アタック決めてくるから！」
「いや。俺この間に飯食ってくるわー」
「ぎゃひひーん！もう知らない！拓也なんて滅んでしまえー！」
滅べって……すごいこというな。最近の女子高生は恐いですね。
まぁいいか。と思いつつ体育館をあとにした。体育館をあとにした拓也と和哉は食堂のパン屋でパンを買い外で食べることにした。

## テニスコートで……

「いやー今日はいい天気だなー拓也！こんな日にはなんか運動したいなー！」
「そうか？特にやる気はおきないんがな。」
拓也と和哉は木陰でパンを食いながらそんな話をしていた。そうすると球技大会というのに何かテニスコートの方から音が聞こえてきた。誰が壁うちでもしてるのかと思い見に行くことにした。すると先程とは表情が変わって真剣に壁うちしている織田がいた。
「なんだ。お前が打ってたのか。」「おー水城君に和哉じゃないか！どうしたんだい？二人して今球技大会中じゃないのかい？」
「そこで拓也と昼飯食べてた。そしたらテニスコートでなんか音したから来たんだよ！織田こそ何してるんだ？」
「いやーテニスコート見たらテニスしたくなって！やっちゃった（笑）」
「まぁ説教だな。」
「そんな水城君脅さないでよー」
激しく体を揺らしながら来たし馴れ馴れしいので突きを一発鳩尾に入れてやった。織田の反応はいつも通りだった。一言
「びへら！」
だ。
「まぁいいや。ほっといていくかな。」
「まった！水城君！」
「……何か？」
「テニスしてみないか？君経験者でしょ？」
「！……なんで知ってる？」
まさか静香がいったのか？
「いや見た感じでわかるんだよ！」
いってなかったか……って感なのかな？

「まぁ俺は絶対やらん。」
「逃げるの？水城君。」いきなり織田の雰囲気が変わって拓也はびっくりした。。さっきまでへらへらした奴がいきなり本気になったのだ。だがその態度が気に入らない拓也は、
「いいだろう。」
「俺にビビって逃げるかと思ったよ。」
「はぁ？ふざけんな。てめーなんかいちころだ。」
「じゃあ負けたらテニス部に入ってよ。」
「俺が負けたらな。だけど俺に負けたら二度とテニスに誘うなよ。」
「わかった！約束する。」
「じゃあコートに入りな。」そうして二人は試合することになった。
和哉はコート外でパンを拓也の分まで食べていた。

## テニス対決　1

「ラケットどうする？」
「部室の使うから取ってくる。」
「俺の使いなよ！二本あるから！」
珍しく普通だったから拓也も普通に、
「ありがとう！」
受け取った瞬間なんか握り心地の良さや安心感が感じとれた。
「なぁなんか妙にフィットスるんだが！」
照れ臭そうに織田が言った。
「水城君のために作ってみたよ！」
あれ？こいつとは今日会ったはずだが？拓也は気になって織田に聞いてみた。
「なぁなんで俺ように作れる？今日会ったばっかなのに。」
「中学の時さ大会があったんだ。その時さ一段と輝いている選手がいた。それがそう水城君だったんだ！それでその大会から水城君をオッカケ？的な感じで見てたんだ！それで癖やなんやら分かるようになった。だけど高校に入ってから一回水城君の記事があったと思ったらそれから記事に出てこなくなってねーそうしてから一年？いや二年かな？そうしたら水城君がいる高校に転入になったからラケットつくってみたんだ！だめだった？」
拓也はそれを聞いて一言
「話が長い！」
頭を叩いてやった。
「っ……織田やっぱ真相は知らないみたいだな。」
「水城君なんかいった？」
「いやありがとうってな！まぁいいそれなら俺の強さを知ってるだろ。ならきついんじゃないのか？」
織田の照れ臭そうな表情が曇る。

「まぁ始めたらわかるよ。水城君。」
「おぅ。」そーいいながら拓也たちはコートに入った。
「水城君！ウィッチ？」
「じゃあラフ！」
ラケットがからから回る。
「あーラフだね！どっちとる？」
「じゃあサーブでいいや。」
「じゃあ3ゲーム1セットマッチね！」
そうして試合が始まった。ついでに和哉はパンを食べ終わってコーヒーを飲んでいた。

## テニス対決その2

織田からのサーブでゲームが始まった。トントンとボールを地面に二回ついて構える。拓也は織田に集中してみていた。そして大きくトスを上げた。かなり高く飛んで

「いくぜ！コノサーブはあぶないよ！」

織田も跳びかなり高い打点でサーブをうってきた。

油断していた拓也は一歩も動けなかった。

『こいつやるな……何てむちゃなサーブをうちやがる……』

１５ー０

３０ー０

４０ー０

あのサーブが取れないまま１ゲーム落としてしまった。

『触れる事すら出来ねぇ……何てサーブだ……』

そうすると織田が、

「後２ゲームだね！本気出さないと負けるよ？」

「そ、そうだな。だけど俺が本気を出してみろ！速攻逆転だよ？」

「じゃあやってみなよ！水城君！」

そして２ゲーム目

今度は拓也からサーブで始まる。大きくトスを前に上げる。

「へーぇ。サーブ＆ａｍｐ；ポーチですか。」

拓也は打った瞬間前に出る。これは普通の人ならかなりのプレッシャーになって突っ込んでこないはずなのに、織田はそれをものともせず自分も前に出て来た。多分その時二人は心で思ったであろう。

『勝負！！！』

そのころ静香は体育館でバレーをしていた。

「ナイスアタック静香！」

アタックを決めたはずなのに静香は浮かない顔をしていた。そして静香は叫んでいた。

「拓也のアホー！バカー！」
って感じでね。
多分アタックが決まるのは拓也への怨みをぶつけてるからであろう。
そんな勢いで勝ち進んでいったらしい。

## テニス対決その3

パーンパーン
ボレー対決が続いている。そこで織田が
「そろそろ行くよ！」
その時ドロップショットを打って来た。俺は軽く取ったが今度は織田がロブをあげてきた。絶好なポイントに上げて来てくれたので俺はスマッシュを決めようとすると球が急に減速した。それのせいでスマッシュが打てず相手にチャンスボールを上げてしまう。織田は、スマッシュを打たず、体を一ひねりし回転をかけて球を打つ。
「あまい！おだぁ！」
そういった瞬間球が斜めに落ちてきた。
くっ……まじか……取れなかっただと……
……
……
……
そのまま3－0になった……

「俺が負けただと……」
「僕の勝ちだね！」
「なにかの間違えだろ！」
くそ……かっこわりぃな……
「俺が久しぶりだから負けたんだ！」
なんで負けたからって言い訳してるんだ……
かっこわりぃな……
「いいゲームだったよ！またやろうね！」
「お前……馬鹿にしてるのか？ふざけるなよ？」
かっこわるい……
「水城君……いや水城！おまえ……なんで言い訳ばっかしてるんだ

？あんなにかっこよかったお前はどこにいったんだ？」
「……」
「あんなにかっこよくて強かったお前はどこにいったんだ？」
「うるせぇ！俺のかってだろ！お前に何がわかる！」
「なにもわからないさ！遠くからしか見たことなかったんだから！」
「じゃあ知った口叩くなよ！」
「……」
「かえるわ。」
そおいって拓也は教室に帰っていった。

## 教室にて……

帰りながら拓也は、さっきのことを後悔していた。
『何で俺はあんなことといったんだろ……』
そうすると静香に出会った。
「だ～ぐ～や！何でみてくれながっだのよー！」
半分泣き言に聞こえる。
「悪かったよ。」
「ぶぇ？」
たぶん静香は
「え？」
といいたかったが泣いていたので
「ぶぇ？」
になったのであろう。
「なんだよぶぇって！せっかく人が素直に謝ったのに。」
「だぐやがずなおにあやまっだの始めでだからぶっくりしちゃっだ！」
この時拓也は思った。
『理解しきれない。』と。
まぁ静香をほって置き教室に向かった。
教室に帰ってみたら佐々木がいた。
実は佐々木は中学校からの知り合いで佐々木は元テニス部だった。
「なぁ拓也。あのことは織田に言わないのか？」
「あぁ。もうややこしいことは嫌だからな。」
「そうか。」
そんな会話をしていたら、
「拓也…まだあの事を引きずってたんだ……」
「うぉ！静香いたのか……んでなんで歩伏前進なんだ？」
なぜか静香がいた。しかも歩伏前進で。

こいつ頭大丈夫なのだろうか。と不安がよぎった。
「織田君に話してあげればいいじゃん。」
「いや。あの事は誰にも話さないって決めたんだ。」
「いいじゃん！話してあげなよ！そこにいるんだから。」
「そこって？」
辺りを見回すと……いた。歩伏前進で机のしたにいた。やっぱコヤツ忍者か！なんか満面な笑みだし。そんな織田の顔に一発蹴りを入れてやった。
「きゅっぷわはぁ……ふみゅ」
と叫んで転がっていったとさ。

## 拓也の過去……その？（前書き）

久しぶりの登校……じゃなく投稿です。暇なら見てやってください。

## 拓也の過去……その？

みんなが教室の机に座り俺は語りダシタ。

〜〜〜一年前〜〜〜

俺はまだテニスをしていた。その頃はテニス一筋で毎日のようにやっていた。
だがある大会をきっかけに俺はテニスをやめた。

〜ある大会〜

その大会は、小さな大会であったが俺の中では大切な大会だった。
ライバルだった霧島有平（きりしまゆうへい）が出てたからだ。
「順調に勝ち進んでた俺はあと一勝で霧島と当たるな…」
だけどその時事件が起きたんだ。
「拓也！なんかナイフを持った男が目撃されたらしいぞ！気をつけろよ！」
「佐々木！何を気をつければいいんだ！」
「危ない人には近づくなよ！」
「あぁ。」
ぽーんぴーんぱーんぼ！ん！
『！！？』
「えぇっと…水城君今すぐ本部に来なさい……」
「なんかおかしい…行ってくる。」
俺は全力で本部に走っていった。

〜〜〜〜〜

「それで水城君！それがやめるキッカケ？」「なわけねぇ！まぁ聞いてな。」

〜〜〜〜〜〜

走る事1分。俺は本部に到着した。

「なんかすげぇやな予感がする…まぁ行くか。」

俺は本部の扉を開ける……そこには知らない人がいた。

「やぁ君が水城君だね。」

俺はその人を見たとき思った。

こいつ何するかわからねぇ。

「さて…水城君君はなんで呼ばれたかわかるかね？」

「準決勝の事で呼ばれたかと。」

その中の一人が口を開いた。

「お前生意気。友達が痛い目に会うよ？」

その人の足元を見ると霧島が横たわっていた。

〜〜〜〜〜〜

「それからそれから？」
「ちょっと休憩。」

『『えぇぇぇ！』』
ってことで次に続きます。

## 拓也の過去…？

「その時俺は何が起きてるかわからなかった。」

〜〜〜〜〜〜〜

腹を押さえて転がってる霧島。それを見て笑いながら霧島を踏んでいる奴。

「あなたより先に来たから潰しちゃった。あなたが早く来ればよかったのに。」

……わけわかんねぇ。

「わからないなら教えてやろうか。」

……聞きたくない。

「お前の親が借金作って逃げたんでお前さんから取り立てようってことだ。」

拓也は何も言えずにぼーっと立っているだけだった。その時、

「水城！逃げろ！どこか遠くまで逃げろ！はゃ……がはぁ…」

「うるさい。」

霧島は横腹を蹴られてもがいている……

……俺の中でなにかがキレる音がした。

～～～～～～

「それからはあんまり覚えてない……だけど一つは覚えている……
……」

～～～～～～～

意識が無くなってから何分たったのだろうか……
ふと見てみると俺だけ立っていた。

「拓也！」
「静香かっ……よかったよ！お？佐々木もいたか」
「大丈夫だったか？大きな怪我がなくてよかったな。」

「……霧島！霧島は！」
辺りを見渡してみると…ぐったりとした霧島がいた。俺はすぐ駆け寄っていった。

「霧島！大丈夫か？」

「あぁ…ダメみたいだ……」

「おい霧島？おい！？」

「なんだい！（笑）」
何故か満面の笑みで起き上がったので殴ってやる……
……かわされただと？
「まだまだだね（笑）」
「あっはっは！殺す。」

〜〜〜〜〜〜

「それがやめる理由？」
「いゃ。それからさ。」
「ここからは私や佐々木君も見てたからね……」

〜〜〜〜〜〜

「おそいよ水城！」
「殺。」
追い掛けっ越してたらいきなり霧島が止まる。
「観念したか。滅殺。」
「やばい。水城逃げるぞ。」
そこには倒れていたはずの男が立っていた。
「おまえら俺をこけにしたな…」

「にげて！二人とも！」

俺は霧島の手を引っ張って全力で逃げた。

表を見たら警察がたくさんいたから助かったと思った。

だが……

《サクッ……》

妙な音が部屋に響いた…

**拓也の過去……？**

教室が静まった……

「それから……」

～～～～～～

俺達は外に出た。

その時、警官が

「君達ぃ！大丈夫かね？」

「俺は大丈夫です。お前は大丈夫か？」

そういって霧島のほうを見る。その瞬間顔が真っ青になった霧島を見た。

「これ無理っぽい……わぁ」

「うそだろ……？」

俺に寄り縋ってきた霧島の背中を見る。

霧島の背中には１０センチぐらいの果物ナイフが刺さっていた。

「わりぃ……もう無理だわ……」

「おぃ？お前との決着付けてないんだぞ？なぁ勝ち逃げするなよ！なぁ霧島！さっきみたい追い掛けっしようぜ？なぁ一緒に馬鹿しようぜ？なぁ霧島……きりしまぁ……」

俺の目からは大粒の涙が流れていた。

それから三日後。

霧島の葬式があった。

俺や佐々木に静香は霧島の友人ってことで呼ばれたんだ。

「霧島……」

俺はショックで何も考えれなかったんだ。そしたら

「あなたが水城君ね……」

「はぃ…」

「人殺し。弟返しなさいよ…たった一人の弟返しなさいよ。優しくて面白くて姉貴思いで馬鹿で……」

「スイマセン…」

俺は謝るしか出来なかった。

「ねぇ…返して……返しなさいよ！あんたのせいで……」

「やめなさい！清華！」

そういって霧島の姉の清華さんは連れていかれた。

「ごめんね。水城さん。」

「いぇ…おばさん。」

「あなたがきてあの子も喜んでいるわ。」

「俺があいつを殺したのに？」

「えぇ。」

「スイマセン……俺のせいなんです。」

「自分を責めないで。水城さん。」

「清華さんの言う通りですよ。俺が霧島君を殺したもんなんですよ。」

そうしたら清華さんがやってきて

《パァーン》

……

……

…

俺は帰り雨に打たれがら帰っていた……
梅雨の嫌な雨だった。

## 拓也の過去……4

重くなった空気の中織田が口を開ける。
「それがやめるきっかけなのかぃ？」

「あぁ……」

「なんでやめたんだぃ？」

「霧島を……」

「はぁ？殺したのは水城君じゃないだろ！何自分が殺したみたいな感じになってるんだよ！そんな理由でテニスやめるな。死んだ霧島が可哀相すぎるぞ……」

「……」

ここで今まで黙っていた佐々木が口を開いた。

「黙っていても何もわからない。拓也……あまり過去を抱え過ぎるな……」

そのまま佐々木は教室を出ていった。

「拓也……そんな考えたりしないほうかいいよ。あの時はずっとあほみたいに笑っていたのに……あの時から笑わなくなった。」

「笑ってるさ……」

「笑っていても心のそこから笑ってないじゃない。」

「……」

「ずっといればわかるの……拓也……お願いだから全て一人で抱えないで……お願いだから……」

「ってことだ。水城君。君はわるくない。というよりテニスをしてあげよう……死んだ霧島のために…霧島が死んでやりたくても出来なくなったテニスを水城君がやってあげよう……」

「……」

「じゃあ俺はでるわ……。」

「拓也……落ち込まないでね……じゃ……」

そのままみんなでていった。

俺だってテニスをやりたいさ……

だけど……清華さんを裏切ることになるかもしれない。だから……

球技大会が終わって教室がざわざわしてたころ拓也はそこにいなかった。

**それから～**

「水城君……どこ行ったんだろう……。」

「ふぅ……。」

俺はどうすればいいのか……

これから一緒にテニスをしていいのか……

あいつのために……

「あ～わかんねぇ……。」

「水城……。」

「よー佐々木。」

「……。」

「まぁ座れよ。」

「あぁ……。」

「んで、どうしたんだ？お前が来るなんてな。」

「なぁ……あまり抱え込むなよ……。」

「え……？」

「たまには弱いと所みせろよ…。」
「なにいってんだよ……。」
「あまり偽善者ぶるな……。」
「……」
「なぁ……。」
「あの頃拓也言ってたよなぁ…。」
「……。」
「俺は世界一になるって……」
「あぁ……」
「じゃあなんでだよ！！！何でやめたんだよ！！！」
「霧島のねぇちゃんに言われたから……」
「それが偽善者ぶってるように聞こえるんだよ！」
佐々木が拓也の顔面を殴った。
「イッテェ……」
「いい加減目を覚ませよ……。」

「ん……。」

そして佐々木は教室に戻っていった。

そのままベンチに座って拓也は考えていた……

終礼が終わり織田は、

「水城君～！」

まだ探していた。

「まぁいっか。また明日誘うか。」

「織田～。」

「お！室長！どうしたんですか～！」

「いや～。部活行くのか？」

「行きますよ～♪」

「俺もついていってあげよう！」

「え！マジですか！」

「おぅ！」

そして織田と佐々木はテニス部の部室に向かった。

**迷子の～迷子の～佐々木さん～！**

佐々木と一緒にテニス部に向かった織田たちですが……

「スマン。道忘れた。」

「ええっ！だめじゃん！室長！」

「スマン。俺は極度の方向音痴なんだ！」

「最初にいってくださいよ！」

「いやぁスマン。」

教室から移動して１０分。佐々木＆ａｍｐ；織田は迷子になる。

その頃……

テニス部では、

「なんで織田君は来ないのよ～！」

「永見さん落ち着いて！」

「うるさい！使い捨てキャラＡ！」

「使い捨てキャラＡって何ですか！僕の名前は鈴木ですよ！」

「なんか胡散臭い名前ねぇ～」

「なんでですか！鈴木って駄目ですか！？」

「根本的にダメ。」

「うわぁぁぁぁ～」

鈴木こと使い捨てキャラＡは静香に弄られてた。というかもう出てくることはないだろう。さよなら鈴木。もう出てくることはないだろう。

元に戻って佐々木＆ａｍｐ；織田は……

「室長？ここ校門じゃない？」

「スマン。マジでわからん！」

「おぃおい！それは言わない約束だぜ！」

「なんかキャラおかしいぞ。織田。」

「そんなこと言わない約束だぞ♪」

「さて行くか。」

「チョットー！ちょっとちょっと！」

「ザ・タ〇チのネタをぱくるな。」

「まぁまぁ、たまにはいいじゃマイカ！」

こいつ死ねばいいのに……え！なんで怒ってるかって？道がわからないからに決まってるだろうがぁぁ！俺は道がわかんねーんだよ！佐々木家は代々方向音痴なんだよ！……なんでもないです。忘れてください……

「ってこれってテニス部じゃないですか？」

「おーこれこれ！」

「これ校舎からめっちゃ近いじゃないですか！」

「ちょっちねー！」

「室長……具〇堅みたいな口調になってますよ？」

「きのせいだ。」

「まぁ折角なので入りましょうか。」

……

……

……

「た～の～も～！」

織田がなんか道場破りみたいに入って行くと……

「水城君！着てたんだ！」

そこには水城がいた。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4018a/

---

転校生とテニス

2010年10月14日01時41分発行